和歌―万葉・古今・新古今(6)

古今和歌集

K

※人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける　紀貫之

人は、さあ、心がどう変わってしまったのかわかりません。(しかし、)昔なじみのこの土地は、梅の花が昔のままに香っていますよ。

(春歌上)

L

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　※よみ人知らず

五月を待って咲く橘の花の香りをかぐと、昔親しんだ人の袖にたきしめた香の香りがする。

(夏歌)

M

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを　小野小町

恋しく思いながら寝たので、あの人が(夢に)現れたのだろうか。夢とわかっていたならば、目覚めないでいただろうに。

(恋歌二)

※人はいさ…かつて奈良の長谷寺に参詣するたびに宿を借りていた人の家を、久しぶりで訪れたところ、家の主人から「このように昔のままに宿はありますよ」と言われ、そこに立っていた梅の花を折り取って詠んだ歌。「人」は家の主人を指す。

よみ人知らず…作者が不明であったり、作者の名前を記すことがはばかられる事情があったりする場合の表記。

新古今和歌集

N

春の夜の※夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空　藤原定家

春の夜のはかない夢がふと途切れて(目が覚めると)、峰から横雲がわかれただよいゆくあけぼのの空よ。

(春歌上)

O

道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ　西行法師

道のほとりに清水が流れている柳の木かげよ。ほんのしばらく(休もう)と思って、立ちどまったのであったが(涼しさに思わず長居してしまった)。

(夏歌)

P

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする　式子内親王

(私の)命よ。絶えてしまうものなら絶えてしまえ。生きながらえていると、秘める力が弱まって(恋心を人に知られて)しまうかもしれないから。

(恋歌一)

※夢の浮橋…『源氏物語』の巻の名をふまえたもの。浮き橋のように不安定ではかない夢。

確認テスト 和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) **K**の歌で、昔と変わらないものとしてうたわれているものを選びなさい。

ア 人の心　**イ** なじみの土地の人々
ウ 桜の花の姿　**エ** 梅の花の香り

［　　］

(2) **L**の歌の内容に合うものを選びなさい。

ア 五月に咲く花の香りが、昔の伝統を思い出させた。
イ 橘の香りが、昔親しんだ人のことを思い出させた。
ウ 人の袖の香りが、五月に咲いた花のことを思い出させた。

［　　］

(3) **M**の歌について、「夢と知りせば覚めざらましを」の意味を選びなさい。

ア 夢だと知っていたから、目覚めようとしたのに。
イ 夢だと知っていたならば、目覚めないでいただろうに。
ウ 夢だと知らせていれば、目覚めてくれただろうに。

［　　］

(4) **N**の歌で、夢から覚めた人物が見た風景がえがかれているのは何句目か。当てはまるものを全て選びなさい。

ア 初句　**イ** 二句　**ウ** 三句
エ 四句　**オ** 結句

［　　］

(5) **O**の歌の「しばしとてこそ立ちどまりつれ」の表す意味として適当なものを選びなさい。

ア 少しの間と思って立ちどまったが、思わず長い時間を過ごしてしまった。
イ しばしば立ちどまってしまったために、長い時間がかかってしまった。
ウ ゆっくり休もうと思って立ちどまり、ずいぶん長居をしてしまった。

［　　］

(6) **P**の歌にうたわれている心情を選びなさい。

ア 思いがけないことが起こったことへのとまどい。
イ 何気ないことから感じた、しみじみとした感動。
ウ 人に知られないようにしている、激しい恋心。

［　　］